

### 学生ら10人が参加

この「緑の国際ボランティア研修」は「緑の募金」を活用して緑化活動を助成している公益社団法人・国土緑化推進機構が「友好の森づくり」事業の一環として主催した。タイ、カンボジアなどで環境保全型農業の普及活動を展開しているNPO法人・環境修復保全機構（東京都町田市）が共催。学生ら10人が参加し、8月15日から8日間実施した。

「友好の森づくり」は国土緑化推進機構による国際森林年の記念事業。カンボジア研修のほか、9月にはベトナムでマングループを植樹する環境ツアー、ラオスでも植樹ツアーを実施した。



首都フノンペンから南約80キロのタケオ州フオーサイ地区。苗木を運ぶ元農業指導員のウアイと意欲的だ。植樹には、地区住民をはじめ、カンボジア農省副長官ら要人に研修生ら約200人が参加。約1・5秒に郷土樹種の常緑高木と、成長が早い外来の落葉高木の2種類計2300本を植えた。

### 消えた野生動物

さび色の砂地が広がる貯水池の一角、地元若者に日本の研修生も加わり、歓声をあげながら苗木を植えた。

孫娘(3)と参加し初めて植樹した農家の主婦、ボムン・ヒェリーさん(40)は「乾期は干ばつ、雨期は洪水が起り、極端だ。これは森がないからだ」と話し、「植え方を周囲に広めたい」と意欲的だ。

国連の国際森林年を記念し、一般市民を対象にしたボランティア研修がこの夏、森林伐採が深刻化するカンボジアで行われた。緑化に関する国際ボランティアの育成が狙い。研修生は現地住民と一緒に苗木を植え、農家にも宿泊した。野生動物の減少を憂え、洪水に悩む地域住民に環境保全の意識の高まりを感じ取る一方、自分が緑と縁遠くなっていることに気づき、森林の大切さを改めて実感したようだ。【山本悟(写真も)

# 豊かな森よみがえれ



日本人研修生(左)と一緒に苗木を植える地元住民=タケオ州の植樹会場で

## 伐採深刻化するカンボジアで希望の植樹

■村で再生の試み  
この後、メコン川流域のコンボンチャム州に移動。NPO法人・環境修復保全機構が推肥つくりなど環境保全型農業を指導するワチャ村に入った。道路沿いには、1・2メートルの長さに切られ、うずたかく積まれた丸太を、大型トラックが回収

する光景も見られ、大量に伐採されている現状をうかがわれた。村では、農家の高床式家屋に民泊。森林が伐採され、ヤシの木のはかは目立たない木がないため、村人と機構が共同で村内に元々ある木など村の自然資源調査を実施しているほか、植樹用の苗木の生産に向け苗木つくりの準備も進め、森林再生の試みが始まっている。

■違法伐採後絶たす  
カンボジアの現代政治を研究し、研修で解脫役を務めた東京大学大学院総合文化研究科の研究員、山田裕史さん(33)によると、ポル・ポト政権の崩壊(79年後も続いた内戦が終結したのは90年代末、政治的安定によってこの約10年で経済が飛躍

的に進展する一方、地方にもコーヒーやゴムなどの外部資本によるプランテーション(大規模農園)が増え、森が消えた。都市と農村の所得格差が広がり、貧困にあえぐ農家は森林を開墾して水田や農地を整備した。燃料のまきを確保する目的で、木が切られている。日本外務省の資料によ

高床式住居が並ぶ集落で、研修生は子供たちと交流した  
|||コンボンチャム州ワチャ村で

